『おくのほそ道』の旅

金沢学院短期大学名誉教授
藏角 利幸

芭蕉 10日の足跡

浅野川界隈。芭蕉は浅野川近くの京屋吉兵衛宅で最初の夜を過ごした

「古池や蛙飛こむ水のおと」— 貞享3年(1686)春の芭蕉の句です。和歌では伝統的に蛙を鳴くものとして詠じましたが、芭蕉は「飛ぶ蛙」によって静寂を一層引き立たせるという新しい俳諧的な表現を見い出し、自己の俳諧「蕉風」を確かなものにしました。その3年後、元禄2年(1689)3月に芭蕉は深川の草庵を人に譲り、曾良を伴い5カ月にわたる『おくのほそ道』の旅に出ました。この旅で芭蕉は、敬愛する西行や能因らが詠んだ歌枕の名所や史跡などを訪ねることで、「古歌の真意を理解して俳諧を風雅の伝統に繋がるものにしたい」「未知の国々の有力者や俳人たちと交流し、蕉風への理解を深めたい」という強い意志を持っていました。端的に言いますと、自己の俳諧を一段高めるための自己革新と蕉風の拡大をめざす行脚でした。曾良『随行日記』や諸書の研究成果を参照して芭蕉の金沢10日の足跡を次にしるします。

加賀入りの句「わせの香や」

芭蕉は奥羽を遍歴して盆の7月15日(陽暦8月29日)、加賀の国に入りました。そのさい吟じたのが「わせの香や分入右は有磯海」という句です。百万石の大国を訪問するのに相応しいスケールの大きな挨拶句で、芭蕉の作品の中でも格調の高い秀作として知られています。

午後2時頃、芭蕉と曾良は残暑厳しい城下町金沢の中心地に着きました。滞在1日目は金沢城に近い浅野川近辺の京屋吉兵衛方に宿をとり、真っ先に金沢俳壇の俊秀小杉一笑に到着したことを告げましたが、一笑は去年12月6日、36歳で亡くなったことを知りました。芭蕉は一笑の「時代の先端を行く句風」に共感し、金沢でぜひ会いたい俳人でした。一笑も翁行脚の時は「お宿申さん」(其角『雑談集』)と芭蕉の来訪を心待ちにしていました。

男川と呼ばれる西の犀川。東の浅野川(女川)と共に金沢の文化を育んできた

翌日午前、芭蕉は竹雀(小春の前号か)の手配した迎えの駕籠に乗り、宿を犀川大橋に近い旅人宿本陣宮竹屋喜左衛門方に移しました。宮竹屋は本家(伊右衛門家)と分家(喜左衛門家)の2軒あり、本家は薬屋、分家は宿屋です。芭蕉は大半を分家に宿泊しましたが、本家にも1、2泊したことが、本家の記録と所有していた芭蕉の真筆の発見によって明らかになりました。本家で芭蕉をもてなしたのは、当主の弟で養子となった勝豊でした。勝豊は俳名小春で、当主(勝則)の隠居(貞享3年)に伴い、23歳の若さで商売を切り盛りしていました。小春は芭蕉来沢を機に芭蕉の門人となりました。

芭蕉の金沢滞在は9泊10日で、活動拠点を犀川大橋に近い2軒の宮竹屋に置き、浅野川界隈、寺町界隈、野田山、金石へと歩を運び、金沢俳壇の多くの俳人たちと交流を深めました。現在の片町通りは、芭蕉が頻繁に往来した記念すべき旧跡なのです。

交流を深め、一笑を追悼

芭蕉は7月23日まで滞在し、金沢の俳人北枝・牧童・小春・一泉・ノ松(一笑の兄)・句空・秋の坊・雲口らと風交を結びました。また、金沢で大津の荷問屋乙州、大坂の薬種商人何処にも会いました。17日、芭蕉は立花北枝宅(源意庵。現泉鏡花記念館前)に遊び、北枝・小春・雲口ら6名とともにそれぞれ発句を詠みました。芭蕉は想を練っていた句「あかあかと日は難面もあきの風」を披露しました。19日(推定)、宮竹屋本家(薬種商。小春亭)に宿泊。20日、犀川のほとりの斎藤一泉宅に招かれました。参会者は芭蕉・一泉のほかノ松・北枝・乙州ら合わせて13名。芭蕉の「残暑しばし手毎に料れ瓜茄子」を立句として半歌仙(18句の連句)が巻かれました。「残暑しばし」の句は、のちに推敲され「秋涼し手毎にむけや瓜茄子」に。夕方、野田山に遊び、北枝は「翁にぞかやつり草を習ひけり」と、当時の清遊の様子を伝える臨場感のある句を詠んでいます。21日、芭蕉は北枝・一水を同道して、卯辰山の句空の草庵「柳陰軒」を訪れました。

22日、願念寺で一笑の追善会が営まれ、芭蕉は「塚も動け我泣声は秋の風」と詠じ、深い悲しみを表しました。「心から雪うつくしや西の雲」— これは一笑の辞世の句です。優れた詩人的資質を持っていた一笑は、このように心の澄みきった清らかな一句を残して世を去ったのです。23日、雲口の案内で宮の腰(金石)に遊び、24日、芭蕉は親しく交流した俳人たちに別れを惜しまれながら金沢を発ちました。

加賀蕉門の形成と発展

金沢を旅立った芭蕉は小松、山中、越前の各地を訪れ、8月下旬に旅の終点美濃大垣に至ります。北枝は金沢から越前の松岡(福井の東8km)まで、1カ月近く芭蕉と行動をともにし、折にふれて芭蕉が語る俳談を書き留め、蕉風の核心を学び、次第に加賀俳壇における存在感を高めていくことになります。山中温泉では芭蕉が曾良と別れる際、北枝と3人で曾良送別の歌仙(「山中三吟」)をつくりましたが、北枝は歌仙成立時の芭蕉の句評・添削をあまさず筆録し、後世に伝えました(『やまなかしう』)。これが芭蕉連句の研究上、貴重な資料となり、今日においても連句創作の優れた手本となっています。

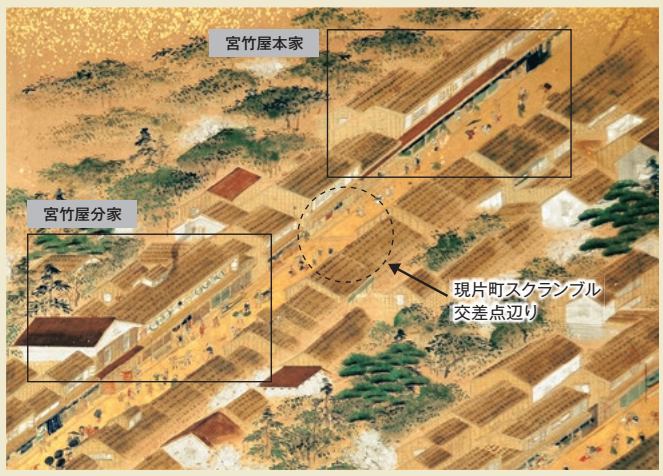
芭蕉来訪を機に金沢の多くの俳人たちが芭蕉の門人となりました。蕉風が深く浸透するにともない加賀蕉門が形成され、全国に注目される蕉門の一大拠点となっていきます。なかでも北枝・牧童(北枝の兄)・句空・秋の坊・万子・小春らは加賀蕉門の有力メンバーとして顕著な活動を続け、優れた作品を発表するとともに『卯辰集』や『西の雲』など多くの俳書を出版しました。加賀蕉門の充実ぶりは他を圧するものがありました。

金沢文化の重要な基盤に

北枝は加越の蕉門を率いて「北方の逸士」「蕉門十哲」として声名が高く、その門下から綿屋希因が出ました。希因は暮柳舎と号し、伊勢派の加越能俳壇の雄として優れた俳人たちを世に送り出しました。見風・既白・闌更・麦水・二柳・珈涼らがその門です(江戸中期)。蕉門の隆盛のなかで、金沢の3人の俳人、闌更・蒼虬・梅室が全国に雄飛し、江戸や京都で活躍しました。闌更は蕉風復興運動の功績者として蕪村らと「天明中興五傑」に、蒼虬・梅室は鳳朗と「天保三大家」に数えられ、広く名の知られた存在でした。

明治時代の中期になると、伝統ある蕉風は大きく揺らぎました。子規派(新派)が台頭し、勢力を拡大しました。金沢が生んだ三文豪、泉鏡花・徳田秋声・室生犀星も俳句に親しみ、なかでも犀星は俳句を文学の出発点としました。

俳句はいつの時代においても金沢の文化を支える重要な要素の一つとして時を刻んできました。明治時代の混乱期にあって荒んだ金沢市民の心を和ませ、落ち着かせたのは大衆が愛する俳句でした。俳句が市民に愛され、隆盛となった根源をたどりますと、芭蕉来訪に行き着きます。



芭蕉が宿泊した二軒の宮竹屋(「金沢城下図屏風」石川県立歴史博物館蔵)

松尾芭蕉と城下町金沢

今から300年余り前、松尾芭蕉は『おくのほそ道』の旅で金沢を訪れました。10行余りにすぎません。しかし、河合曾良の随行日記等にあるとおり、蕉門を広める公式流を深め、積極的に活動しました。時は元禄2年(1689)7月半ば。城下町としての整備を終えた金沢は人口6万人を超え、江戸・大坂・京都に次いで賑わっていました。『百工比照』『東本百合文書』で知られる第5代前田綱紀の治世で、加賀文化の花開いた時期です。芭蕉は、このように過ごし、このような影響を及ぼしたのでしょうか。芭蕉が金沢に滞在した後世にどのような影響を及ぼしたのでしょうか。

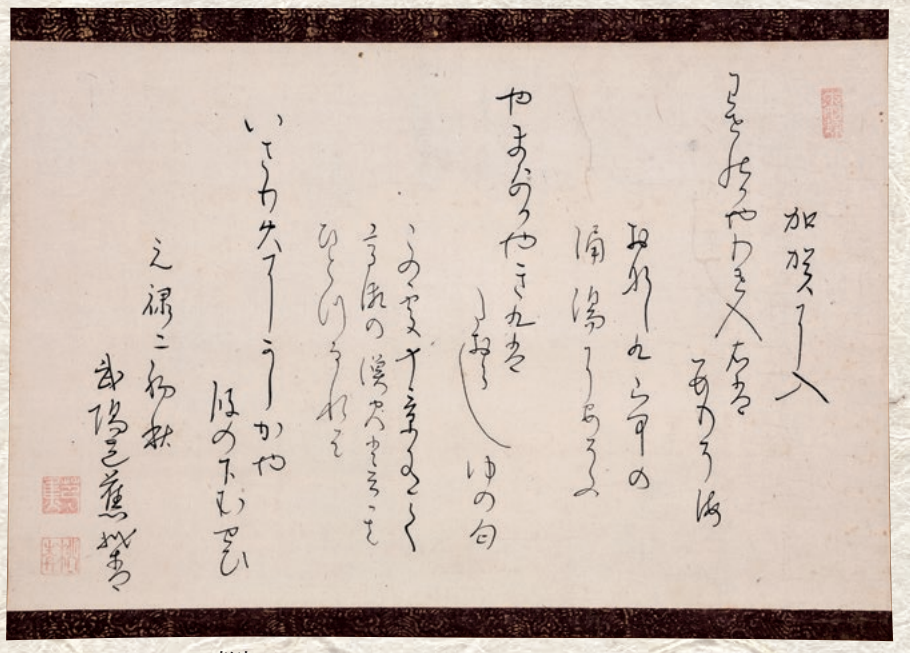
(監修：金沢学院大学学長 秋山 稔)

[発行] 金沢市文化政策課
金沢市広坂1-1-1
TEL.076-220-2442
2017.3 発行

芭蕉ゆかりの書画像

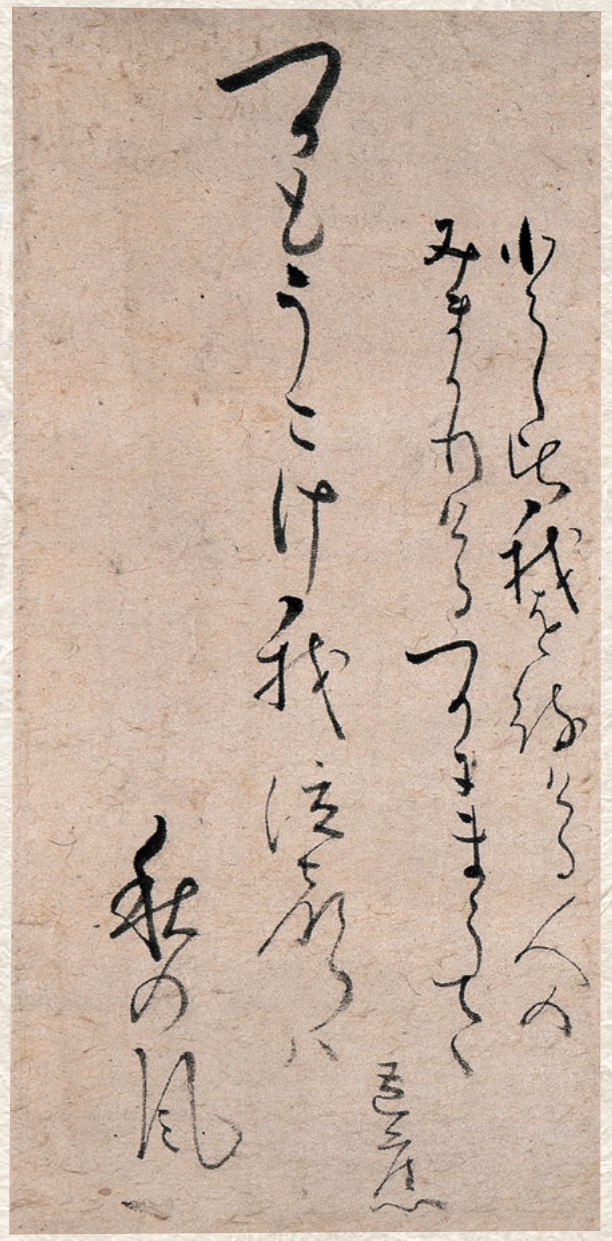
閲 閲覧可
予 閲覧要予約
不 閲覧不可

金沢市立玉川図書館
近世史料館
(076)221-4750
石川県立図書館
(076)223-9580



新発見の芭蕉真筆「加賀山中懐紙(かいし)」(軸装)
[福井県立美術館蔵]

『おくのほそ道』の旅で芭蕉が金沢の俳人小春(宮竹屋本家、薬種業)に贈った句。明治以降に散失したが、平成25年(2013)に発見され真筆と断定された。懐紙(和歌・俳諧用の正式な用紙)に加賀入りと山中温泉滞在の句、三句が書かれている。「わせのかや わけ入右は ありそ海」「やまなかや きくはたおらじ ゆの匂(におい)」「いさり火に かじかや波の 下むせび」。不

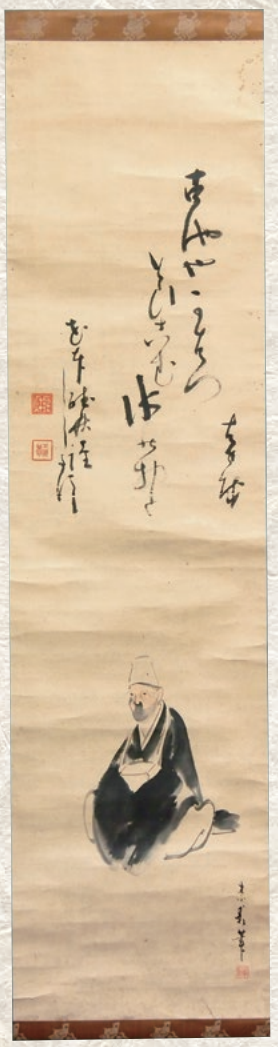


「おくのほそ道」芭蕉句(芭蕉真筆・軸装)
[那谷寺(なたでら)(小松市)蔵]

金沢で亡き一笑に捧げた句「つかもうごけ我声は秋の風」。前書きに「とし比(年頃)我を待ける人のみまかりけるつか(塚)にまう(詣)でゝ」とある。追善会で染筆されたものとみられている。不

芭蕉翁旅立ちの図
[成学寺蔵]

彩霞(さいか)(江戸末期〜明治初期)筆。絹本。不



「古池や」句賛芭蕉画像
[個人蔵]

花本十一世聴秋(はなのもと ちょうしゅう)筆。素影画。句の染筆は不識庵聴秋(ふしきあん)〈嘉永5年(1852年)〜昭和7年(1932)〉。京都の蒼虬門(そうきゅう)八木芹舎(きんしゃ)に師事。全国を遊歴し、特に金沢の俳人五六屋(高岡磯次郎)と親しかった。桜橋畔に「さい川の水みなぎりて不如帰」の句碑が建つ。紙本。不

芭蕉画像
[金沢市立玉川図書館近世史料館蔵]

明治37年(1904)晩夏に島野一松(いっしょう)が肖像を、暮柳舎甫立(ぼりゅうしゃほりゅう)が賛を書いた。「蜀魂声横たふや水の上」。俳諧中心の富田文庫にある。紙本。閲

芭蕉の頭陀袋(ずだぶくろ)
[個人蔵]

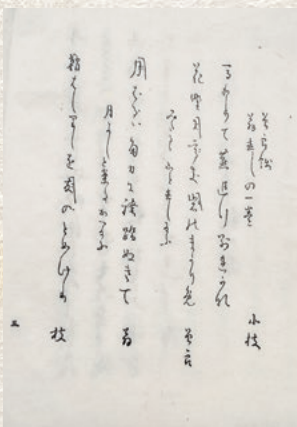
元禄2年(1689)7月24日、芭蕉が金沢を出立する時、小春は芭蕉に新しい頭陀袋を贈った。これは芭蕉が行脚で使っていたもの。不

西の雲(上・下) [石川県立図書館蔵]

俳諧撰集(せんしゅう)。ノ松(べしょう)編。京都井筒屋庄兵衛、金沢三ヶ屋五郎兵衛、この両版元から元禄4年(1691)10月刊。上巻は元禄2年(1689)7月の芭蕉来訪を機に、ノ松(べしょう)が弟の一笑の追悼会を催した折の追悼歌仙3巻と、一笑の句100余りを収録。下巻は各地芭門諸家の句を四季別に収めたもの。「歌仙」は俳諧連歌の代表的形式で36句から成る。閲

其角刀芭蕉像
[小坂神社蔵]

芭蕉門人の筆頭といわれる宝井其角(たからい きかく)が彫った像。暮柳舎(希因)の系統に代々受け継がれ、芭蕉の命日(12月12日)には一門が当神社に集い、この像を祀(まつ)って翁忌(おきなぎ)を修し、俳諧を催した。文政11年(1828)、神社の所有に。不



やまなかしう
[石川県立図書館蔵(月明文庫)]

俳諧撰集。可大編、天保10年(1839)刊。「おくのほそ道」の旅での歌仙「山中三吟」(『卯辰集』)の草稿「翁直しの一巻」を収録。北枝が芭蕉の句評・添削を生々しく伝える貴重書である。閲

卯辰集(うたつ)
[石川県立図書館蔵]

俳諧撰集。北枝編、句空序。元禄4年(1691)、金沢三ヶ屋五郎兵衛ほか刊。加賀蕉門最初の俳書。鶴来の楚常(そじょう)の遺稿を北枝が増補。下巻に曾良への餞別歌仙「山中三吟」を収める。閲

北枝画像
[心蓮社蔵]

立花北枝の友人矢田四如軒(しじょけん)が描いた北枝の肖像画を、石川県文化委員玉井敬泉が模写した。北枝の句「しぐれねば又松風の只(ただ)おかず」は、敬泉の知友で俳人桂井未翁(みおう)の筆による。紙本。北枝没後250年追悼俳句大会の折、俳人高林卜天(ぼくてん)(箔業)が寄贈した。昭和40年(1965)頃。予

芭蕉句碑

観 拝観可　開 開門時拝観可　不 拝観不可

❶ 本龍寺（金石西 3-2-23）

昭和24年（1949）建立。銭屋五兵衛の墓があることでも知られる堂々たる門構えの寺である。その本堂前の一隅に、垣根に囲まれて建つ。筆は、本龍寺門前で医業を営んでいた俳人蔵月明による。「翁　小鯛さす柳すゞしや海士が軒」。開

❷ 野蛟神社（神谷内町へ 1）

宝暦13年（1763）建立。芭蕉が句空の柳陰軒を羨望、そのことを詠み元禄5（1692）年、江戸からわざわざ芭蕉の書き送ってきた次の句が刻まれている。「うらやましうき世の北の山ざくら」。中央に「芭蕉翁」の三文字があり、天明期、与謝蕪村らと蕉風復古に尽くした高桑闌更が芭蕉70回忌を営んだ折、建てられたものという。文字も闌更のもの。なお、闌更の師は綿屋希因であり、その師は加賀俳壇の祖立花北枝である。観

❸ 宝泉寺（子来町 57）

建立年次不明。建立には郷土史家松本三都正がかかわる（『金沢の文学碑』）。「柳陰軒趾ちる柳あるじも我も鐘をきく」。柳陰軒句空は京で剃髪したあと、ここ宝泉寺の近くにあった久保市山金剛寺のかたわらに庵を結んだ。元禄3年（1690）春、句空に宛てた書簡によって芭蕉が柳陰庵でかり寝（旅寝）したことがわかる（田中善信注釈『全釈芭蕉書簡集』平成17年刊）。句については芭蕉作を否定する説がある。観

❹ 兼六園 山崎山上り口

弘化3年（1846）建立。「あかあかと日は難面も秋の風」。天保三大家の桜井梅室の筆による。もとは卯辰山の麓にあったが、廃藩置県後に兼六園が開放され、明治16年（1883）この地に移された。翌年、碑の建立者で梅室を師とする雪袋により記念の俳書『秋風集』が刊行され、染筆に至る経緯が梅室の手紙に詳しく記されている。開

❺ 田井菅原神社（天神町 1-3-16）

明治21年（1888）建立。「風流の初やおくの田植うた　芭蕉」。菅原秀司謹書。当神社は明治13年、加賀藩十村役田辺家の広大な敷地に設置されたもので、藩政期、その周辺に田井村の水田や畑が広がり、耕作に励む村人たちが住んでいた。その歴史を振り返ると、田植え歌の風流を吟じた句碑がこの地に建つ意義は大きい。一説には他所から移設されたという。観

❻ 犀川河畔（大橋を片町側から渡り左へ、川沿いの小公園内）

昭和33年（1958）建立。「あかあかと日はつれなくも秋の風」。この碑は、はじめ犀川大橋南詰に建っていたが、後に左岸上流の小公園に移された。句碑建立を推進したのは俳人・画家の小松砂丘で、その著『砂丘放談』（昭和46年刊）によれば、俳文学者殿田良作等を相談相手とし、犀川振興会に費用を依頼して建立した。手取川上流桑島から運んだ大きな自然石に、砂丘筆蹟による芭蕉句が刻まれている。

❼ 成学寺（野町 1-1-18）

宝暦5年（1755）建立。現在残されている句碑では、この碑が最も古い。正面に蕉翁墳と彫られ、芭蕉追慕の塚として建立されたことが分かる。碑の右側に「あかあかと日はつれなくも秋の風」と刻し、左側に宝暦5年、金沢の俳人堀麦水たちによって建てられたと記されている。文字も麦水によるものであろう。観

❽ 願念寺（野町 1-3-82）

昭和42年（1967）建立。門前左に小杉一笑の死をいたむ翁直筆の「つかもうごけ我泣声は秋の風」を刻んだ句碑が建つ。前書きに「芭蕉翁来訪地　小杉一笑墓所」とあるのは、もちろん別人の筆。境内には一笑の辞世の句を刻む「一笑塚」と墓とがある。元禄2年（1689）、一笑追善会には20余名が出席、芭蕉・曾良をはじめ句空・秋の坊・北枝・何処・牧童・小春らが墓に詣で追善の句をなした。観

❾ 本長寺（野町 1-2-8）

大正4年（1915）建立。「春もやゝけしき調ふ月と梅」。幕末に生を受け、明治・大正時代に活躍した金沢の俳人句空庵5世今村賢外（1839～1924）が建てた。賢外は麥文や甫立等と共に金沢俳壇の実力者で、芭蕉が好んで画賛句（自ら描いた画に句を書く）とした春景色の作品を碑に刻んだ。しかし表面の摩滅が進んだため、昭和57年（1982）に住職が俳人黒田桜の園に染筆を依頼し、その文字を碑に写した。観

❿ 長久寺（寺町 5-2-20）

昭和63年（1988）建立。芭蕉が訪れた斉藤一泉の松玄庵がこの近くにあったという縁で、そこで詠んだ句（実際にはあとに直されたものが『おくのほそ道』に収められている）を刻み、境内に建てられている。「秋涼し手毎にむけや瓜茄子」。刻字は素龍清書本による。開

⓫ 覚源寺（菊川 2-8-18）

明治22年（1889）建立。建立者は自立舎止白。碑の正面に「蓬農冢（蓬の塚）」、右側面に芭蕉句「あかあかと日はつれなくも秋の風」。この年は芭蕉来訪200年、4月に金沢市が誕生したという節目の年。芭蕉碑の建立は、市民の間に明治維新後の混乱から抜け出し新時代への明るい展望を開こうとする記念碑ともいえる。平成23年（2011）確認の碑である。観

⓬ 上野八幡神社（小立野 2-4-1）

明治16年（1883）建立。諸書によれば、最初のものは寛政元年（1789）以前に建てられたといわれるが、それが失われ、新たに明治16年「此の地（略）に山寒してふ翁の句碑ありし　いつの頃にか失ひつるを（略）再びここに築事」したと副碑に記されている。句「山寒し心の底や水の月」。ただしこの句は、門人支考の偽作とする説がある。観

芭蕉ゆかりの地

観 拝観可　開 開門時拝観可　不 拝観不可

❶ 記念碑「芭蕉翁巡錫地」（小坂神社）（山の上町 42-1）

この社に芭蕉は参詣、神社北側にあった谷あいで船遊びをし、句会まで開いたと伝えられている。しかし、確証はない。石段中程に俳人塩田紅果の筆で「芭蕉翁巡錫地」と刻まれた碑がある。角柱の碑で、横に「共讃」と刻まれ、北枝の句が記されている。「此の山の神にしあれば鹿に花」。明治24年（1891）の建立。観

❷ 心蓮社（山の上町 4-11）

立花北枝の墓と碑がある。墓石正面に「趙北枝先生」と大きく刻まれ、その両脇に「享保三年五月十二日」の命日が彫られている。墓石の右側には、平成3年（1991）「あらうみ会」が会誌600号の刊行を記念して建立した北枝顕彰碑が立つ。代表句「しぐれねば又松風の只おかず」の文字は加賀の俳人麦水の筆跡を写したものである。なお、この寺の「絹本著色阿弥陀三尊来迎図」は国の重要文化財として知られ、また、その庭も「めでた造り」といわれる遠州流庭園として金沢市の名勝指定を受けている。

観 建物内部は住職在宅時のみ

❸ 蓮昌寺（東山 2-11-23）

石段脇に「秋の坊碑在境内」とある。碑は山門をくぐると、右奥本堂前の一隅にある。建てたというよりも築いたというにふさわしい。風化がすすみ、秋の坊の3字がからくも読める。この碑の建立者等は一切不明である。口伝では、秋の坊はこの境内に庵を構えていたといわれ、その縁で碑が築かれた。なお、この寺は泉鏡花の絶筆「縷紅新草」の舞台として、また丈六の木彫「釈迦如来立像」（「金沢三大仏」の一つ）を祀る寺として有名である。観

❹ 立花北枝宅跡（下新町6-21〈久保市乙剣宮右横〉）

北枝はその居を転々としており、一応旧観音町（現東山1丁目）に始まり、下新町、春日町と住みかわり、そこに「源意庵」を構えていた。芭蕉が訪れたのは、下新町説が有力で、ここで「あかあかと」の句が初めて披露されたといわれている。

不 建物内

❺ 宮竹屋伊右衛門家（本家、薬種業）跡（片町 2-2-15 辺り）

芭蕉は2軒の宮竹屋に宿泊した。本家は伊右衛門家で薬種業（片町）、分家は喜左衛門家で旅人宿・手判問屋（川南町）。2軒とも大通りに面し、ごく近くに位置する隣近所であった。金沢9泊のうち、芭蕉は宮竹屋に8泊した。そのうち本家に1、2泊した。本家には俳人小春が養子として入り、あるじの兄勝則の隠居にともない事実上の当主として芭蕉をもてなした。本家は「芭蕉の辻」の石標のある北國銀行片町支店の辺りである。

❻ 石標「芭蕉の辻」

昭和53年（1978）、金沢市芭蕉遺蹟保存会（会長山本清嗣）が建立。高さ60㎝（幅21㎝）。正面の「芭蕉の辻」は、命名者である当時の金沢市長岡良一氏の筆による。左側面に「元禄二年初秋蕉翁奥の細道途次遺蹟」と刻す。石標建立を記念し、遺蹟保存会は芭蕉「あかあかと」句を第1句とする歌仙を成就し、浄書の上、近くの養智院に献納した。

❼ 宮竹屋喜左衛門家（分家、旅人宿）跡（片町 2-21-3 辺り）

喜左衛門家は旅人宿本陣と手判問屋を営む。手判問屋は藩の命によって関所の通行手形（墨で紙におした手形）を渡すところ。芭蕉来訪時の当主武富（分家初代）を竹雀（俳号）とする説があるが、確かな証拠はなく、小春の前名とする説が有力視されている。武富の弟小春（勝豊）は、芭蕉来訪以前からこの家にはおらず、養子先の本家において芭蕉をもてなした。のちに分家宮竹屋は酒造業に転じ、銘酒「菊一」をつくる。大きな鬼瓦をのせた赤瓦の酒蔵と広い間口（15間）は、ひときわ目を引く大店であった。

❽ 松玄（松源・少幻）庵跡（寺町 5-1-33 辺り）

この場所が特定できたのは、金沢在密田靖夫氏の永年にわたる芭蕉研究の成果による。斉藤一泉が芭蕉たちを招じた所である。芭蕉はここで、「瓜茄子」の句を詠んだ。

❾ 一笑塚（願念寺）（野町 1-3-82）

一笑の菩提寺「願念寺」の境内にある。「一笑塚」と刻まれた文字の横に、一笑追善の俳諧撰集「西の雲」に収められた辞世の句が彫られている。「心から雪うつくしや西の雲」。昭和31年（1956）建立。筆は俳人の蔵月明による。開

芭蕉を訪ねて金沢を歩く

卯の花山・くりからが谷をこえて、金沢は七月中の五日也。爰に大坂よりかよふ商人何処と云者有。それが旅宿をともにす。一笑と云ものは、此道にすける名のほの〴〵聞えて、世に知人も侍しに、去年の冬、早世したりとて、其兄追善を催すに、

塚も動け我泣声は秋の風

ある草庵にいざなはれて

秋涼し手毎にむけや瓜茄子

途中唫

あか〳〵と日は難面もあきの風

芭蕉『おくのほそ道』（岩波文庫）

高村右暁画 芭蕉像 ［個人蔵］
右暁（慶応３年〜昭和 29 年）は北陸画壇屈指の画家（金沢）